

令和8年度 山陽小野田市中学生海外派遣事業 帰国報告書



令和8年7月29日(水)～8月9日(日)

山陽小野田市

山陽小野田市

目次

中学生海外派遣事業概要……………	2
------------------	---

1 目的

2 派遣先

3 派遣期間

4 派遣生徒及び引率者

5 スケジュール

活動日誌……………	4
-----------	---

ホームステイ報告及びホストファミリーの紹介……………	8
----------------------------	---

・派遣生徒

・引率者

◆中学生海外派遣事業概要

1 目的

山陽小野田市と友好都市モートンベイ市との交流を図り、もって両市の友好親善と相互理解を深めるとともに、広い視野と国際感覚を持った次代を担う人材を育成することを目的とする。

2 派遣先 オーストラリア クイーンズランド州 モートンベイ市



3 派遣期間 令和8年7月29日(水)～8月9日(日) 12日間

4 派遣生徒及び引率者(敬称略)

いわもと りさ 岩本 梨沙	竜王中学校 3年	さかい しげゆき 酒井 竣哉	小野田中学校 2年
ふくだ あやめ 福田 彩萌	高千帆中学校 3年	ひろせ じゅんのすけ 廣瀬 潤之介	厚狭中学校 2年
おきた あんじゅ 沖田 庵樹	厚陽中学校 3年	ささき てるまさ 佐々木 瑛正	埴生中学校 3年
ながとも よしひこ 長友 義彦	教育長	あんどう ともえ 安藤 知恵	市民活動推進課主幹



5 スケジュール

【出発前】

第1回オリエンテーション 5月19日(火)18:30~20:00 市役所3階大会議室
第2回オリエンテーション 6月21日(日)8:30~18:00 本山地域交流センター
海外派遣事業壮行会 7月24日(金)16:00~16:30 市役所3階大会議室
第3回オリエンテーション 7月24日(金)16:30~18:00 市役所3階大会議室

【オーストラリア派遣期間】

7月29日(水) JR厚狭駅~福岡空港(出発)~台北桃園国際空港(乗継)~
7月30日(木) ブリスベン空港(到着)~モートンベイ市へ
レッドクリフステートハイスクールにて歓迎式、終了後校内で過ごす
7月31日(金) レッドクリフステートハイスクールで授業を受ける
8月1日(土) ホストファミリーと過ごす
8月2日(日) ホストファミリーと過ごす
8月3日(月) ローンパインコアラサンチュアリーへ遠足
8月4日(火) レッドクリフステートハイスクールで授業を受ける
8月5日(水) スカーボロ小学校(※1)訪問、ハンピーボング小学校(※2)訪問
8月6日(木) レッドクリフ図書館・美術館・博物館見学
8月7日(金) レッドクリフステートハイスクールで授業を受ける
8月8日(土) ホストファミリー全員とさよならパーティー
ブリスベン空港(出発)~台北桃園国際空港(乗継)~
8月9日(日) 福岡空港(到着)~ JR博多駅~JR厚狭駅着
※1 スカーボロ小学校は高千帆小学校の姉妹校
※2 ハンピーボング小学校は赤崎小学校の姉妹校

【帰国後】

帰国報告会 10月2日(金)17:00~ 市役所3階大会議室



活動日誌

日付	報告者	活動内容
7/29 (水)	廣瀬 潤之介	厚狭駅で、家族とお別れをして、新幹線に乗った。家族と別れるときは少し寂しかったけれど、これからのワクワクもあり、楽しみ。新幹線に乗ったあと、地下鉄に乗って福岡空港に着きました。そこで日本円からオーストラリアドルにお金を両替しました。そこでオーストラリアの紙幣はプラスチックで、ふにゃふにゃしていて不思議でした。
7/30 (木)	福田 彩萌	飛行機が遅延しました。初めて深夜まで起きていたけど、あまり眠くはなかったです。オーストラリアに着き、飛行機を出ると少し肌寒かったのを覚えています。看板や聞こえてくる言語、全て英語で本当にオーストラリアに来たんだと嬉しかったです。無事に入国審査も通過し、そのままバスに乗ってレッドクリフハイスクールへ。車窓から見える景色も日本とは全く違う…わけではなかったです(左側走行、右ハンドルなど)。しかし、バスのシートベルトが違ったり、道路が広かったり違うところもありました。レッドクリフハイスクールの前でバディが待っていてくれました。最初は緊張して何も話せませんでした。その時に初めて心細さを感じました。放課後、バディと一緒に海辺を散歩しました。海をみたことなんて片手で数え切れるほどしかなかったのですごく嬉しかったです。その日の晩御飯はチキンカレーでした。私が来る前に好きだと言っていたから作ってくれたそうです。とても美味しかったです
7/31 (金)	佐々木 瑛正	ハイスクールに着いて最初の授業は year11/12 の生徒との日本語の授業でした。私が日本人なので、話題を提供しやすく、良い勉強の場になりました。終了後、モートンベイ市長に挨拶をしに行きました。とても緊張して、用意していた文章も伝わったか分かりません。その後の理科の授業は、自由な校風が感じられるものでした。エネルギーについての授業のはずが、皆でピタゴラスイッチを制作しました。帰宅後、Matthewと一緒に軽い買い出しに行きました。MAGNUM classicというチョコレートのアイスを勧められ、一緒に食べました。この日は、日本からのお土産を渡しました。中でも箸とガラスの皿は喜ばれました。まだ緊張があり、質問に答える受動的な会話が多くなったのが反省点です。

日付	報告者	活 動 内 容
8/1 (土)	沖田 庵樹	今日は、朝の 6 時に起きて、フォスとファミリーのみんなで、海の周りをジョギングしました。定期的に朝、ジョギングをするミニイベントがあり、たくさんの人が参加をしていました。体力のない私にとって、ハードな運動になったけど、朝焼けのきれいな海のそばを走る爽やかさは忘れられません。帰宅後、マヤと一緒に日本のチーク菓子をつくりました。何に対しても、関心を持ってくれたり、驚いてくれるので、買ったかいがありました。お昼すぎにみんなで海の近くの公園で遊びました。その日の晩にバーベキューと焼きマシュマロをしました。なかなか外でする機会がないので感激しました。
8/2 (日)	岩本 梨沙	今日は公園のような場所に行って野生のカンガルーを見てきました。公園というより屋外で、檻がない動物園のような感じてした。ここではカンガルー以外にも沢山の動物を見ることができるそうです。カンガルーの中には子連れもいたので、とても貴重な経験になりました。家では妹と一緒にゲームをしました。スイッチでカービィや外国のゲームなどを一緒にやりました。とても楽しかったです。その後ホストファザーと妹と一緒にショッピングモールに行きました。オーストラリアのショッピングモールはとにかく広かったです。店の数も多く、色んな種類のお店がありました。食品売場では全部のものが基本大容量で大きく、重たかったです。牛乳なども日本のような紙パックではなく、プラスチック製の大きな入れ物に入っているものが多かったです。
8/3 (月)	酒井 俊哉	ローンパイン・コアラ・サンクチュアリに行きました。サンクチュアリというのは聖域という意味だそうです。コアラの聖域、かっこいいなと思いました。動物たちが自由気ままに暮らしていて、楽しそうな動物園だなと思いました。虫を触ってみたのですが、思いの外生き生きとしていました。

日付	報告者	活 動 内 容
8/4 (火)	福田 彩萌	2 時間目はメンタルの授業でした。そういう分野が好きなので英語が理解できたら面白かったと思います。でもほとんどは UNO をしていました。それもまた楽しかったです。そしてお昼ごはん。今日はラズベリージャムのサンドイッチとクラッカーでした。バディが教室に来てくれたので一緒に食べました。3 時間目、フルーツバスケットならぬ食べ物バスケットをしました。帰ってからバディの子から飲み物をもらいました。パッケージから牛乳だと思って飲んだら全く違いました。よく見たらバニラアイスと書いてありました。日本で言うクーリッシュが牛乳パックの中に入っている感じです。今日の晩御飯はパンプキンスープとパンでした。味噌汁が好評だったので良かったです。フルーツバスケットの説明を英語でしました。翻訳に一回頼ってしまったけれど、褒められたので嬉しかったです。
8/5 (水)	佐々木 瑛正	最初に訪れたスカーボロ小学校では、児童数の多さと敷地の大きさに驚きました。この学校には、オーストラリアの国旗や、アボリジニやトレスという民族のシンボルが掲げられていました。次にハンピーボング小学校を訪れました。ここの児童は早いうちから日本語に触れているようで、よく「こんにちは」と言われました。帰宅する途中でレッドクリフボールクラブに行って、ローンボールをプレイさせてもらいました。ルールを良く理解していませんでしたが、会話の中で探っていったのは良かったと思います。その後、Matthew が通うスカウトを見学しに行きました。複数の子供がいて、オーストラリアのリアルな子供のノリを見る事が出来たのが良かったです。 
8/6 (木)	酒井 俊哉	図書館、美術館、博物館の 3 つの施設に行きました。オーストラリアの図書館は、録音スタジオのようなものがあり、最先端なんだと感じました。また、博物館にはオーストラリアの歴史が伝わるものがたくさんあり、自分の今後インスパイアされそうなものもありました。美術館でパックマンを作ったのですが、友達に預けてもらっています。

日付	報告者	活 動 内 容
8/7 (金)	沖田 庵樹	今日は学校最後の授業を受けました。1 時間目にステージホールのような場所でダンスをしました。そのウォーミングアップとして、小さな輪から次の輪へ移動する、いわば椅子取りゲームをしました。その後にメインのダンスをしました。下手でもみんなとリズムに乗って踊ることができたので、最高に楽しかったです。2 時間目に特等席で演劇を見ました。英語で内容があまり理解することができなくても、十分に楽しむことができました。学校が終わった後、サプライズで展望台に連れて行ってくれました。そして、家族みんなで買い物に行きました。色々な商品を目の前に、ワクワクが止まりませんでした。その日はマヤと一緒にトランプとチェスで遊びまわりました。
8/8 (土)	廣瀬 潤之介	今日は昼からさよならパーティーがありました。その前にホストファミリーとご飯を食べに行き、ピザを注文しました。予想以上に大きく一人で食べました。その後さよならパーティーに行き、撮影したビデオを見たり、山陽小野田音頭を踊ったり、箸を使うゲームをしました。最後の楽しい思い出になりました。さよならパーティーが終わって、みんなとお別れをしました。さみしい気持ちもあったけど笑顔でお別れできたのでよかったです。そこからバスで移動して、ブリスベン空港に着きました。長時間みんなと UNO をしたり話しをしたりして、とても楽しかったです。
8/9 (日)	岩本 梨沙	飛行機を乗り継いで福岡空港につきました。日本に着くとまず暑いと思いました。オーストラリアでは日差しこそ強かったものの気温はそこまで高くなかったので、福岡に着くと暑かったし、ジメジメしているように感じられました。看板や放送での言葉が日本語だったので安心しました。向こうでは英語だけで聞き取れないときもあったので、日本語の看板とか放送を聞くと帰ってきたんだと実感しました。機内食を何度か繰り返すうちに機内食はその国によってだいぶ変わってくるんだと感じました。厚狭駅に着くと、集合写真を撮って解散になりました。



派遣生徒と
ホストファミリーの皆さん



竜王中学校3年

いわもと りさ
岩本 梨沙

1 計画 (Plan)

私の野望 (今回の目標)

どんな環境でも自分から積極的に交流する。

達成のための3つの作戦 (戦略)

1. 自分から話しかける
2. 相手との共通の話題を見つける
3. 会話に詰まったら自分から新しい話題を切り出す



2 行動 (Do)

やってみたこと	心揺さぶられた瞬間や印象に残ったシーン
・オーストラリアの人達と英語でたくさん会話をすることが出来た。 ・日本にはない食べ物をたくさん食べた。 ・モートンベイ市長に挨拶をした。	・栈橋を歩いた時にその景色がとても綺麗 ・ブリスベンに行った時に大きなビルなどの多さに感動 ・ホストファミリーだけでなくその子どもの友達とも遊ぶ ・意外と日本のことを知っていて話が合った。

3 評価 (Check)

今回の旅の自己採点

70点!



●理由: 沢山のひとと話すことは出来たけど、大体向こうから話しかけてきてもらっていることが多かったから。会話をする時に答えが遅くなってしまうことがあったから。

●次へのレベルアップ (今後どう活かす?)

自分から話しかけることを意識していきたいと思いました。なぜなら、今回の派遣事業を経て、知らない人と取るコミュニケーションの大切さや面白さ、楽しさを知ることが出来ました。この感覚を忘れずにこれから過ごしていきたいです。

そして、自分の言いたいことはきちんと言葉にする大切さも知ることが出来ました。日本では空気を読むという文化のようなものがあり、相手が察してくれることも多いですが、向こうではその機会が少なく、自分で言わなければ伝わらないという場面が多くあったからです。

冒険の舞台：学校生活での挑戦

オーストラリアの学校に行っていて、驚いたことはたくさんあります。日本の学校と比べて校則がかなり緩いことや、オーストラリアでは先生が自分の教室を持っていて、生徒が授業科目ごとにその先生の教室へ移動するなどと日本と違うところは多くありました。でも私が一番印象に残っているのは「清掃員がいる」ということです。

生徒が普通に授業を受けている時間に清掃員の人がほうきでゴミを集めたりしていました。日本では学生が学校を掃除するのが当たり前なので不思議でした。更に驚いたのは、教室の外の廊下に吐き出したガムが沢山へばりついて黒くなっていたことです。歩く時に多いなと思いました。日本の学校ではこんなことは見ないので少しショックでした。日本の学校は、自分たちで掃除するからこそ、綺麗に使おうという気持ちが育つのだと思いました。

毎日、ほうきで掃いたり雑巾で拭いたりしていると、自然と汚したら自分達で片付けないといけないと思うからです。オーストラリアでは掃除は清掃員さんの仕事だから、生徒たちはあまり気にしないのかもしれないと思いました。

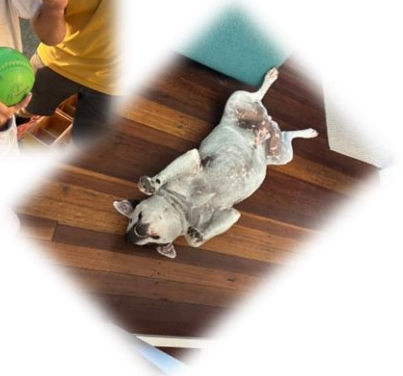
日本の学校での掃除の時間は少し面倒だ感じていましたが、実は大事なことでした。

日本に帰ってからの掃除時間はより丁寧にやっていきたいなと思いました。



もうひとつの家族：ホームステイの思い出

私のホストファミリーは Hammond(ハモンド)さん一家でした。母の Gemma(ジェマ)、父の Kris(クリス)、兄の Finlay(フィンレイ)、妹の Rosie(ロージー)です。出発前はホストファミリーに会えることをとても楽しみにしていたと同時に、私にとっての初めての海外生活を上手くやっていけるか不安もありました。しかし、Hammond さん一家はそんな私の心配を吹き飛ばしてくれるくらい、とても優しく接してくれました。



オーストラリアでのホームステイで一番不安だったのは、英語がちゃんと話せるかどうかでした。でも、ホストファミリーはいつも私のペースに合わせて、ゆっくり話したり、分からないところは分かりやすい言葉に変えてくれたりして安心できました。レストランに連れて行ってもらったときには、メニューが文字だけでどんな料理か想像できず困っていましたが、ホストファミリーが「これはこういう料理だよ」と優しく説明してくれました。オーストラリアのレストランでの注文は選ぶ項目が多くてびっくりしました。カレーひとつでも、何の肉を選ぶか、肉を使ってないカレーを選ぶか、サイドメニューは何を選ぶかなど、メニューを理解するのに苦労しました。



家では、Fin と Rosie ととても楽しく過ごしました。オーストラリアに行く前に、私の好きなアニメを伝えていたら、ホストファミリーがそのアニメを見ていてくれて、着いてからその話題で盛り上がりました。お土産として英語版の「ワンピース」の漫画本を持っていったら、ファザーの Kris まで喜んでくれて嬉しかったです。また、私はけん玉が得意なので、けん玉もお土産に持っていきました。私がけん玉をやってみせると、It's so cool!と言ってくれて嬉しかったです。けん玉のやり方を教えると兄の Fin はどんどん上達していきました。これからもたまには、けん玉をしてきていたらいいなと思いました。

私の人生のターニングポイント

ホームステイを経験して、私は以前よりもっと英語を話せるようになりたいと思いました。特に忘れられないのは、本当に海外に来たのだと実感した瞬間です。飛行機が日本の空を飛び立って視界いっぱいには海が広がると私は今、日本から出たんだと不思議な気持ちになりました。

現地では、ホストファミリーや学校の生徒たちと話す機会がたくさんありました。うまく英語が出てこないときもありました。その時は翻訳アプリや先生に頼ることが多かったのですが、私は自分の口で英語を話して相手とコミュニケーションを取りたいと思うことが多々ありました。英語は学校で科目として勉強することも頑張ります。そしてその先にある人と繋がるための大切な道具として使う英語も、上手にならないといけないと感じました。そして、次に海外に行くときには、今回よりもっと自信を持って、現地の人たちと会話を楽しめるようになりたいです。



未来の派遣生へのメッセージ

オーストラリアでの生活は、本当に楽しいです。英語で話したり、違う文化の人達と生活したり、毎日が新しい体験ばかりです。最初は不安かもしれないけれど、行ってみるとワクワクすることのほうが多いと思います。日本から一緒に行く仲間もいるので心強いし、困ったときは助け合えます。こんな経験は、誰にでもできるわけではありません。だからこそ、思い切って挑戦してみてください。きっと自分の世界が広がります。

お世話になったホストファミリー



父: Kris Hammond

母: Gemma Hammond

兄: Finlay

妹: Rosie

犬: Ziggy



小野田中学校2年

さ か い し ゅ ん や
酒 井 竣 哉

1 計画 (Plan)

私の野望(今回の目標)

オーストラリアの人と同じくらい、フレンドリーでいる
ここでしか味わえないことを存分に楽しむ

達成のための3つの作戦(戦略)

1. はっきりと、自分から話しかける
2. 興味があるものはできるだけ挑戦する
3. 苦手そうなことでも一回はやる



2 行動 (Do)

やってみたこと	心揺さぶられた瞬間や印象に残ったシーン
・沢山の人に話しかけた ・オーストラリアの食材(ミートパイ)などに挑んでみた ・日本の食べ物も食べて、本場との違いも体験してみた	・みんなとってもフレンドリーで、温かさを感じた ・初めての食べ物が多かったけど、どれもこれも美味しい物がたくさんあった ・細かいところで日本との違いを体感できた ・ファンタオレンジの味が日本よりとっても濃かった

3 評価 (Check)

今回の旅の自己採点

90 点!



●理由

知らない単語がたまにあった時に、そこで調べたり、適当に返事をしてしまうのは会話として良くないと思いました。

●次へのレベルアップ(今後どう活かす?)

単語を100倍くらい覚えて、そこで躓きません。

もしも次に行くとしたら、14歳だった自分にしかできなかったことのように、その年だからこそできることを思う存分満喫します。

冒険の舞台：学校生活での挑戦

オーストラリアの学校で一番驚いたのは、なんといっても雰囲気です。ゆるい雰囲気もそうですが、それ以上にみんなフレンドリーで、初対面なのにタッチしたり、これ絶対日本ではありえないなということの連続でした。自分はできるだけ色々な人と仲良くしたかったので、それに驚いているだけではなく、自分もフレンドリーに接するようにしました。

そのおかげか、最終日が近づくにつれて、明らかに挨拶をして貰える人の数が増えていました。それが一番嬉しかったです。



ランチは、日本では給食ですが、オーストラリアはお弁当。手軽にすぐ食べられるだろうと思った自分が愚かでした。思った以上にボリュームで喋っていたらすぐ時間が経つので気をつけてください。僕の家だけかもしれませんが。



授業に関しては、日本語のクラスが殆どで、いろいろな人と自己紹介をしました。その中でも、喋ってビビッときた人も何人かいたので、そこから友達関係が生まれたこともありました。最初の2日目に授業で行った「だるまさんがころんだ」は、特に楽しかったです。

理科の授業や道徳の授業といった日本でも馴染み深い科目はあったのですが、理科では、装置のようなものをグループで組み立てたり、道徳では映像を見て感想を述べたりしました。

友達とはハンドボールというオーストラリアで人気のゲームを、朝や昼休憩の時に一緒にやってさらに親交が深まりました。

校外学習では、オーストラリアの歴史や美術についてたくさん学びました。びっくりするようなものも数多くあり、こういうのもちゃんと心に刻んで帰っていきたいと思うものばかりでした。



もうひとつの家族：ホームステイの思い出

ファミリーには、初日から手厚くサポートしてくださったのを覚えています。人の優しさって、こんなにもいいものなんだなと思いました。これだけサポートしてもらっているのだから、決められたルールは絶対守ろうって気持ちになり、そして家族とも絆をはぐくむことができました。バディとは、家でいろいろなことをしました。バスケットをしたり、ゲームをしたり、一緒にアニメを見たりしました。どれが一番楽しかったかと聞かれたら、その答えは一生出ないと思います。全部、同じくらい最高に楽しかったからです！



私の人生のターニングポイント

元々僕は、英語ができる方だと思っていました。いざホームステイに行くと、大体の簡単な会話はできましたが、いざというときに単語がわからなくて、遠回りの表現をしてしまったことが、少なくなかったです。よく使う単語は調べたりして、覚えておいたほうがいいと思います。そして、心の中の焦りが少し減ったなとも思いました。今までは学校の中で、こうしないと、こうやらないとまずいと思い焦ってしまう日々が多かったのですが、この派遣で本当に色々なものがあることを知り、必要以上にこだわったりすることがなくなったのは良かったと思います。将来は海外で活躍したいって、さらに思えるようになりました。

未来の派遣生へのメッセージ

皆、優しいです。自分がミスをした時、そこから何かできるようにとか、気を取り直すために手を差し伸ばしてくれます。その優しさを、遠慮なく受け取り、その分自分自身も、その人達にできることを精一杯してあげてください!!途中は長いと思うかもしれませんが、終わると何故かあっという間に感じます。その間、本当にその場でしかできないことをやってください!!1秒でも長く!!

お世話になったホストファミリー



父: Amy Windsor

母: Dave Andrew Windsor

バディ: Eli Windsor

兄: Kodi Sydney Windsor

弟: Zade Windsor



高千帆中学校3年

ふくだ あやめ
福田 彩萌

1 計画 (Plan)

私の野望(今回の目標)

どんな人にも臆せず、自分から話しかけられるようになる

達成のための3つの作戦(戦略)

1. はっきり喋る
2. 「Hello」「Thank you」など反応をする
3. 自分から質問をして会話を続ける



2 行動 (Do)

やってみたこと	心揺さぶられた瞬間や印象に残ったシーン
・ハイスクールの生徒に自分から声をかけた ・持参した日本食(緑茶、味噌汁)と一緒に飲もうと誘った ・さよならパーティーでのスピーチ ・自分で朝食、昼食をつくる ・手伝い(芋の皮むき) ・フルーツバスケットを1回翻訳に頼ったが説明できた	・家の近くの海のきらめき、潮風の匂いと肌寒さ ・海に沈んでいく夕日の神々しさと眩しさ ・猫のもふもふな毛並み ・ふとしたときの生徒の香水の匂い ・バディの子が作ってくれたおやつの甘さ



3 評価 (Check)

今回の旅の自己採点

65 点!

- 理由: 翻訳に頼ってしまったから。

自分の発音が悪くて伝わらない場面があったから。

- 次へのレベルアップ(今後どう活かす?)

英単語などの勉強をする時、発音を聞いて自分も口にしてみます。実際に使う英語を覚えま
す。ホストファミリーやできた友達との連絡を絶やさず、英語の使い方を学びます。

冒険の舞台：学校生活での挑戦

一番驚いたのはオーストラリアの学校は4時間授業だということです。バディに、日本では6時間授業で帰るのは17時くらいだと伝えたらとても驚かれました。2時間目の後、3時間目の後にランチタイムがありました。ランチは生徒がやっている売店や自分の家から持ってくるなどさまざまでした。給食はなかったです。私は自分のランチを晩御飯の後にホストマザーと作るようになっていたのですが、いつもサンドイッチを自分で作り、スナック、フルーツを何にするか選ぶ方式でした。その際にいつもマザーは持って行くスナックを選ばせてくれます。しかし、その中にもこれはランチには向いていないと言われたものもあるのでなにか規則があるのだと思います。それはいちご味のプロテインバーでした。しかし同じ種類の違う味のものは良いらしいのであまり詳しくはよくわかりません。



その教科の担当の先生の教室まで行くこと(例えば物理の授業を受けるなら物理の先生がいる教室まで行く)も驚きました。だから生徒はリュックを持って休み時間に移動します。私が受けた授業に来た生徒はみんなノートパソコンと筆記用具、ノートしか持っていませんでした。タブレット、筆記用具、ノートは日本と同じだけど、教科書や資料集などはありませんでした。バディと一緒に宿題をした時、全てノートパソコンでやっていました。

バス、自転車、車、キックボードなどで登校したり、ピアスやネックレス、ブレスレット、ネイルなどのアクセサリーを着用したり、比較的自由だと感じました。乗っていたバスにキックボードを抱えながら乗車してきた人も何人か見ました。

仲良くなった生徒から聞き取れた中で「in Japan、your、job」などのことをよく聞かれました。よく意味がわからなくて「No」と答えましたが、よく考えてみると私のバディは14歳からバイトを始めていたというから、オーストラリアでは学生のバイトが認められているのでしょう。つまり、日本人の私も同じようになにかバイトをしていると思われたのかもしれませんが。バディの友達の中には13歳から始めた人もいます。

制服のスカートや体操服のズボンなどが短かったのも気になりました。バディいわく、私が持っていった中学校の体操服の半ズボンはい長いらしいです。重ねてみましたが半分ほどしかありませんでした。なぜそんなに短いのか聞きました。理由は主に2つあるそうで1つが熱中症防止のため、もう1つが体育をやりやすくするためらしいです。私達が行ったときは冬でしたがオーストラリアの夏はとても暑いそうです。熱中症防止のために体操服や制服が短いなら相当暑いのだと予想ができました。



もうひとつの家族：ホームステイの思い出

一番驚いたことは寝るのが早いということ。私のホストファミリーは 21 時就寝でした。調べてみるとオーストラリアは多くの人々が早く寝る習慣があるらしいです。スーパーも日本のように 22 時までだったり 24 時間営業ではなく、早い時で 19 時には閉まっていた。夜も早ければ朝も早かったです。マザーは 6 時 45 分にはもう仕事に行ってしまいます。ホストシスターも働いていたのですが、朝会ったことがありません。私は 6 時半には起きていたのでそれよりも早く仕事に行っていることになります。早く寝るから身長が高い人が多いのかもしれませんが。

食事はすべて美味しかったです。日本は主食、副菜、主食、汁物などたくさんの種類があります。それに伴ってお皿の量も増えていきますが、私のホストファミリーはカレーだけで副菜なし、スープとパンだけ、のようなひとりひとつの大皿での食事でした。これは日本とは違うとはっきり言えると思います。

休日に連れて行ってもらったスーパーは同じ種類の物がたくさんありました。一番驚いたのは牛乳です。私達が普段行くスーパーで売られている牛乳は大きくても 1L ですが、3L でした。それも、日本だったら同じ種類の牛乳があっても約 20~30 本だと思いますが、オーストラリアのスーパーには恐らく同じ牛乳は 50 本以上ありました。コーナーがとても広がったです。



私が一番楽しかったホストファミリーとのおでかけはいちご農園です。いちごを採って、食べて、探して、とても楽しかったです。そこで食べたいちごのアイスクリームは忘れられません。美味しさもそうですが、なんといっても大きかったです。手のひらが埋まるほどのカップいっぱいには果肉入りのいちごのアイスクリームが詰め込まれていました。風もアイスも冷たかったけど、最高の思い出です。



私の人生のターニングポイント

オーストラリアに行って、もっと英語を話せるようにならないといけないと思いました。もともとあまり英語が話せる方ではありません。だから7日目くらいまで翻訳に頼りきりでした。話すとしても同じ言葉を何回も使っていました。しかし、8日目くらいにホストマザーから翻訳に頼らず、自分の言葉で話してみてもとわれ、それなりにショックでした。だからその日から私は一切翻訳に頼らずに会話を試みました。自分がわかる単語やジェスチャーを使いましたが、思ったよりも通じたのでもっと早くからやっておけばよかったなと後悔しました。でも、一人で海外の家に泊まるという経験は簡単にできるものではありません。すごく良い経験をしたと思っています。もしまた行く機会があればそのときは翻訳に頼らず、自分の英語スキルをアップさせて訪れたいと思います。

未来の派遣生へのメッセージ

何も喋れなくても、頭が真っ白になってもとにかく笑顔でいましょう!!何を言ったら良いかわからないときは「I see.」と言ったり、「Really!?!」と言うのがおすすめです。最初は不安でいっぱいでしたし、9割何を言っているのか分からなかったです。でも、お別れのときは泣くほど悲しかったです。どれだけ辛くても頼る相手は限られています。自分ならできる!と声に出したり応募したときのワクワクを思い出したりしてみてください。



お世話になったホストファミリー



父: Anthony Henderson Glen

母: Kim Louise Glen

バディ: Reese Glen

姉: Mackenzie Jae Glen

猫: Poppy, Cola, Shandy



厚狭中学校 2 年

ひろせ じゅんのすけ
廣瀬 潤之介

1 計画 (Plan)

私の野望 (今回の目標)

オーストラリアの色々な食文化や食べ物を
食べたり、調べたりする。

コミュニケーションをとれるよう行動に移す

達成のための 3 つの作戦 (戦略)

1. 積極的にいろいろなものを食べてみる
2. 自分から話しかける
3. 日本の食文化とどこが違うかなどをしっかりと考え
比較してみる



2 行動 (Do)

やってみたこと	心揺さぶられた瞬間や印象に残ったシーン
・まずは何でも食べてみる ・苦手なものは NO とはっきり伝える ・山口の郷土料理を振る舞う (瓦そば)	・ブリスベンの夜景はすごく綺麗だった ・スクールの生徒たちが意外と日本の言葉やアニメ、 文化などを知ってくれていた ・みんなノリが良く、よく話しかけてくれた ・日本の授業はクラスに先生が来るが、オーストラリアで は授業を受ける先生の教室に行くことにびっくりした

3 評価 (Check)

今回の旅の自己採点

80 点!



●理由: 初めて見る景色や風景や食事、どれも良い経験になったけど、会話をする時にもう少し英語が聞きとる事ができて、話せたら良かったです。

●次へのレベルアップ (今後どう活かす?)

日常の食生活の大切さを改めて実感したので日頃から感謝を持ち続けます。

コミュニケーションを大切に、英語力も伸ばしていきたいです。

冒険の舞台：学校生活での挑戦

私達は、モートンベイ市のレッドクリフ・ステート・ハイスクール (Redcliffe State High School) に通いました。主に日本語教室で授業を受けました。ハイスクールでの授業は、日本と違って授業を受ける先生の教室へ移動しました。ランチタイムは2回あり、ご飯を食べたり遊んだりします。そしてオーストラリアはハンドボールが有名で構内のいろいろな床にハンドボールに使用する線が引いてありました。帰宅時間も14時くらいには授業が終わり帰宅します。帰宅してから家で過ごす時間が長いのは良いなと思いました。日本の学校との違いに驚く事が多かったです。



ハイスクールで初めて授業を受けた時は、どのように接していいのかわからず、あまり自分から話しかけたり、交流を深めることは難しかったです。しかし、いろいろな生徒と授業を受けていると、どのように話せばいいか、何を伝えるのかなどがわかるようになっていきました。

そこで僕がオーストラリアの生徒と会話するときに重要だと思ったことがあります。それは、間違いを恐れずにハキハキと英語を話すことと、笑顔で接することです。間違いを恐れていると、自分が伝えたいことがあまり相手に伝わらなかったり、話しかけても話が進展しなかったりします。間違いを恐れず、自分が伝えたいことをハキハキと話す事が、自分にとっての成長に繋がると思いました。

そし笑顔で接することで、相手との距離を縮めることができたり、親しみやすい印象を与えられるので、会話が始めやすくなります。そのため笑顔で接するのはとても大事だと思いました。



もうひとつの家族：ホームステイの思い出

僕のホストファミリーは母のアンドレアスさん、息子のアイザックの2人でした。

心に残ったのはホストファミリーの優しさです。初めて会った時から笑顔で話してくれて、観光や買い物にも連れて行ってくれました。僕は初めオーストラリアの食が合わず、ご飯をあまり食べることができませんでした。ホストマザーに相談すると、話をしっかり聞いてくれて、何なら食べられそうかなどすごく気を使ってもらいました。ハンバーガーが好きだと伝え、手作りのハンバーガーを作ってくれました。ランチにはいつもサンドイッチを作ってくれました。とても美味しかったです。そのおかげで自分が食べられそうな物が見つけれ、その後の派遣事業がもっと楽しいものになりました。



休日にはブリスベンに行きました。海外のマクドナルドを食べてみたいと伝えと連れて行ってくれて、その他にもショッピングをしたり、夜景を見たりしました。ブリスベンの夜景は今まで見た中で一番綺麗な景色でした。

最後の夜ご飯は瓦そばを作りました。本当はラーメンを持って行きたかったのですが検疫に引っかかることを知り、瓦そばに変更しました。アイザックは初めて食べる茶そばとつゆに苦戦していましたがアンドレアスさんは美味しいと食べてくれました。

僕がいつも食べている日本の食を紹介できて嬉しかったです。



アンドレアスさんは悩みを何でも聞いてくれ、アイザックはいつも笑顔で接してくれました。2人のおかげでホームステイ先ではまるで自分の家の様にリラックスして過ごす事ができ、オーストラリアの日々はとても楽しいものになりました。

私の人生のターニングポイント

オーストラリアに行く前は、英語を使って現地の人と会話することが不安でした。しかし現地の人と交流してみると、思ったより自分の伝えたいことが伝わったり、みんなが話しかけてくれて、不安だった英語での会話が楽しいものになりました。

そして、オーストラリアでタクシーを派遣生徒みんなで待っていた時間もとても楽しい時間でした。滞在期間中は日本人に会えるのは派遣事業の仲間だけです。初めはこんなにみんなと仲良くなれるとは思っていなかったけど、オーストラリアに行ったからこそわかり合える悩みなど共感をし、心の支えになってくれました。何気ない瞬間だったけどあの瞬間も僕の楽しい思い出です。

この派遣事業に参加したからこそ出会えた仲間です。仲間の大切さを改めて実感することができました。



そして海外に行ったからこそ、改めて日本の食文化の大切さも実感しました。日本には沢山美味しい日本食があります。当たり前だと思っていた日々の食事をもっと大切にしようと思つめ直すきっかけになり、日本の食文化は素晴らしいと改めて実感しました。

これから挑戦してみたいことは、いろいろな国に行く事です。オーストラリアのブリスベンの夜景がすごく綺麗でとても心に残っています。世界の綺麗な景色をもっと見たいと思いました。またオーストラリアの食があまり合わず、初めは食べられないこともあったけど、いろいろ探して挑戦してみると美味しかった食べ物も沢山ありました。この派遣事業で食文化の違い感じたことで、色んな国の美味しい食べものを探してみたいと思いました。

未来の派遣生へのメッセージ

オーストラリアに行くことで、自分の考え方が沢山変わります。怖がって全然話さなかったり、失敗を恐れると経験できるものもできなくなるのもったいないです。笑顔でいろんな挑戦をしてみてください。

お世話になったホストファミリー



母: Andreas Ariyani

子: Isaac



厚陽中学校3年

おきた あんじゅ
沖田 庵樹

1 計画 (Plan)

私の野望 (今回の目標)

現地の人とコミュニケーションを取る

達成のための3つの作戦 (戦略)

1. 怖がらない
2. 自ら進んで会話を持ちかける
3. 恥を捨てる



2 行動 (Do)

やってみたこと	心揺さぶられた瞬間や印象に残ったシーン
・とにかく話せなくても 単語、ジェスチャー、絵でも なんとか伝える	・初めて海外の人と話す時の緊張感とワクワク感で胸がいっぱい になった ・朝焼けに照らされる海は琴線に触れる清らかな景色だった

3 評価 (Check)

今回の旅の自己採点

60 点!



- 理由: 英語で伝えることができないからといって、話しかけるのを躊躇したから
- 次へのレベルアップ (今後どう活かす?)
相手と自分の共通点を見つけてみます。
沈黙を恐れません。

冒険の舞台：学校生活での挑戦

オーストラリアの学校では日本と異なる点が多く、驚きました。特に、生徒の一人ひとりが自分らしさを大切にしていることです。日本だったら印象重視で校則がありますが、オーストラリアの生徒はそれぞれ多様な個性を持っているように感じました。

授業や会話をする時、どうして誰もがフレンドリーで意欲的なのかと思いました。それは自分の考えを積極的に表現できることにつながるからだと思います。他にも、先生と生徒の距離が近く、気軽に会話をしていたり、授業中に質問や意見交換が多いことです。そして何より、日本と比べて時間に対しておおらかでした。登校したら授業のギリギリまで友達と会話をしたり、朝食を食べたりしています。

さらに学校が4時間授業で終わることにも驚きの連続でした。改めて自分の当たり前や固定観念に執着していたことに気付かされました



学校外で特に驚いたことは町並みや風景が違っていたことです。どこもかしこも二階建てばかりでした。それについて調べると、オーストラリア独特の気候への適応という理由があるそうです。そして、大概の家には国旗やトランポリンが設置されています。どこも庭が広くて、新鮮でした。

もうひとつの家族：ホームステイの思い出



私のホストファミリーは母のスヒマヤさん、父のジョージさん、妹のレミちゃんとエディちゃん、そして、バディのマヤのにぎやかな家族でした。そして私が困った時、「大丈夫!」と声をかけて、小さな困難も笑いで吹き飛ばすような優しい家族でした。

私が一番心に残ったことは、初めてホストファミリーの家に行った時、私用の水筒とネイルチップと髪留めをプレゼントしてくれたことです。初めて会うのに、暖かく接していただきました。今でも大切に使っています。他にも、私が「アボカドトースト」を食べてみたいと言ったら、わざわざ朝食に作ってくれましたし、モートンベイシティに連れて行ってくれたときにも、本場のアボカドトーストを頼んでくれました。

モートンベイシティでは、いろいろな建物をシティキャットというフェリーで見て回りました。例えば、ストリートブリッジや、Qut です。その時に渡っていた川は「茶色いへビ」と呼ばれていることを教えていただきました。改めてホストファミリーに、オーストラリアについてたくさんの事を教えてもらいました。



そして、私が何より一番心配していた英語だったけど、ホストファミリーに英語が苦手でうまく伝わらないかもと告げた時、私に英語を教えてくださいました。おかげで滞在初日と比べ、拙い英語が良くなった気がします。



滞在 4 日目の夜に、ホストファミリー全員でおしゃれなレストランに行きました。「遠慮なくていいよ!」と言われて美味しい料理を、みんなで食べることができたのが何より嬉しかったです。そのレストランには子供の遊び場があり、マヤとエディとレミの 4 人で遊んだことも私の思い出です。

最後の日には、サプライズで展望台へ連れて行ってくれました。近場で見る町並みですら綺麗と感じているのに、展望台で見る景色は一味違った綺麗さがありました。そして、そこで一緒に食べたアイスも今までで一番美味しいと感じました。ホストファミリーと過ごしてきた時間は楽しいの連続ばかりでした。

私の人生のターニングポイント

1 つ目は、何かに対しての先入観が消えたことだと思います。オーストラリアに対してはじめは「初対面でもフレンドリー」「シドニー＝オーストラリア」「自然や動物が中心の国」というイメージを持っていました。また、危険な動物が多い国という印象もありました。

しかし、実際のオーストラリアは私が思っているよりも都会で、多くの外国人が暮らしている多文化な国だと分かりました。また、都市の発展がすごい、魅力的な国だと分かりました。オーストラリアのすべてが私の持っていたイメージ通りではないことに気づきました。

2 つ目は何事にもチャレンジする勇気が身に付いたことです。英語、食事、生活など、自分の知識が通用しないため、不安に感じることもありました。しかし、やってみないとどうなるかは、誰にも予想することができないので、オーストラリアの生活の中で、積極的に行動を少しずつとれるようになったと思います。この経験から、失敗を恐れるよりも、まず挑戦してみることが大切だと学びました。

海外派遣を通して、勝手な固定観念を持たないようになったことと、チャレンジする勇気が身に付いたことが私の変化だと思います。これらの経験を活かして私は、知らない環境でも飛び込んで行きたいと思います。その時々得た知識を自分と周りの人のために使えるように挑戦していきたいです。



未来の派遣生へのメッセージ

なにも心配することはありません。オーストラリアに行くまでが怖いだけで、後はどうしてもできちゃいます。海外への不安は向こうに着いたときの楽しさですぐさま消えます。失敗を恐れず自分から一歩進んでみてください。きっと今までに知らない世界と、新しい自分に出会えます。

お世話になったホストファミリー



父: Jorge Correia Lima

母: Sarah Margaret Moore

バディ: Suhimaya Nash

妹: Remi, Edith



埴生中学校3年

さ さ き てるまさ
佐々木 瑛正

1 計画 (Plan)

私の野望(今回の目標)

自分の英語がどれくらい伝わるのかを知って、英語力を上げる。

また、様々な人がいるオーストラリアで、日本人としての価値観を見直す。

達成のための3つの作戦(戦略)

1. 海外派遣事業の前に、早口な英語を聞いてなるべく耳を慣らす。
2. とにかく様々なものを見て、体験する。
3. 現地の人(ホストファミリー以外とも)と積極的に話す。



2 行動 (Do)

やってみたこと	心揺さぶられた瞬間や印象に残ったシーン
・ローンボールという競技 ・現地の日本食レストランでの食事 ・生姜焼き作り ・日本のポップカルチャーの紹介 ・友人作り ・オーストラリアのスカウトの見学 ・猫への接触 ・モートンベイ市長への挨拶	・ハイスクール前バス停に降りた際、紫外線の強さを肌で感じた。 ・Matthewと一緒に散歩に行った際、空の美しさを見て感動した。 ・Cindyに連れられて見たオーストラリアの珍しい鳥がうるさかった。 ・現地の日本食は意外にも美味しかった。オーストラリアの茶葉が使われたお〜いお茶の味は日本のものと変わらなかった。 ・コアラの触感がラグのようだった。 ・カンガルーが稀に通るため注意という看板を町中で見つけた ・Macca'sのカフェラテが甘すぎた

3 評価 (Check)

今回の旅の自己採点

70 点!



- 理由: さまざまな経験を得て、文化交流もできました、もう少し英語が話せたらと望む場面がありました。
- 次へのレベルアップ(今後どう活かす?)
学校の勉強としてではなく、実際に使う英語として楽しんで英語能力を向上させたいです。

冒険の舞台：学校生活での挑戦

規模感への驚き

私たちが滞在した、レッドクリフステートハイスクールは、西エリアと東エリアに分かれていました。10棟以上の小さな建物からなっていました。日本ではなかなか見られない学校のつくりだと感じました。学年には year11・12 があり、日本でいう小中高一貫校のような形で、総生徒数は約 1400 人であると聞きました。この人数に合わせて、敷地もとても広がっていました。

日本語クラスの人々

日本語クラスがいくつかあり、その中には日本人の教師が担当するものもありました。今回の派遣中、日本語クラスへの参加が多かったため、現地の日本語の事情を知ることができました。特に year11 や 12 のクラスでは、日本のポップカルチャーを楽しんでいる人が多かったです。オーストラリアでは、高校生にあたる year11・12 になると、選択して受けられる授業が増えるそうです。そこで日本語を選択しているのだから、日本の文化が好きなのだと思います。

日本語クラスでは、最初の方で自己紹介の仕方を教えているようです。彼らの自己紹介の練習として、私たちも何度も自己紹介をすることになりました。

year7 の生徒の日本語クラスでは、パソコンを使って duolingo の日本語コースを授業に利用していました。日本でも GIGA スクール構想で独自のアプリケーションを使うことがありますが、duolingo を利用するのは新鮮でした。初級の言語学習教材としてとても使いやすいと思うので、日本でも利用すれば良いのではないかと思います。



時程の違い

日本の学校では一日に 6 時間授業があることが多いですが、ハイスクールは 4 時間でした。午後 2 時には帰宅となる日が多かったです。また、昼食のスタイルも自由で、給食はありませんでした。各々がお菓子やサンドイッチ、果物などを持ってきていました。移動しながら食べている生徒もいて、自由な雰囲気を感じました。私は、お菓子や果物ではもの足りなかったです。日本の小中学校で美味しい給食を食べられるのは、とても幸運なことなのだと実感しました。

授業内容

私たちは日本語クラスの他にも理科や道徳、美術などの授業に参加しました。特に、理科の授業ではオーストラリアの自由な雰囲気が感じられました。授業内容はエネルギーの種類と変換でしたが、教師は「goldberg machine」を作るように言いました。それは、日本で言うところのピタゴラスイッチでした。私は自由奔放な人たちと一緒に制作したのですが、彼らはかなり自由に遊んでいました。しかし、教師は近づいても怒るわけではありませんでした。冷静にプランを聞き、それを実現するためのアドバイスを与えていました。また、初対面にも関わらず私たちに興味を持って話しかけてくる人もいて、フレンドリーで自由な国民性を感じました。

もうひとつの家族：ホームステイの思い出

食生活

夕食でラム肉のステーキをいただくこともありました。

オーストラリアやニュージーランドは牧羊が盛んな地域なので本場の味を味わうことができて幸運でした。



生姜焼き作り

ホストファミリーに日本食を披露しようと思い、生姜焼きのタレを持っていったのですが、調味料の分量を間違えたり調理の順番を間違えたりと、悪戦苦闘しました。その結果、パサパサの生姜焼きと薄いスープが出来上がりました。事前に練習をしておけばよかったと後悔することになりました。生姜焼き自体はタレのおかげでなんとか良い味になりました。その後、日本から持ってきたお菓子を試してもらいました。そこでは、紗々の抹茶味とぶどうのグミが人気でした。また、抹茶味の kitkat も好評でした。ここで意外だったのが、コロロというぶどうの触感が特徴のグミがあまり人気でなかったことです。感想を聞くと、strange(奇妙)と言われて笑いました。確かに、透明な皮があるようなコロロの食感は、外国人には奇妙なのかもしれませんが、これも一つの学びになりました。

レッドクリフボールクラブ

Matthew と Rod は、ここでローンボールという球技をしていました。左右で重さが異なる球を転がし、目標との距離を競うゲームです。主にシニアの方々が楽しんでいるようでした。私も体験させてもらい、この球技の楽しさと難しさを感じることができました。その際 Rod が買ってくれたアボカドのサンドイッチや炭酸水が美味しかったです。私が球を目標に当てた際には、Matthew だけでなく、知らない高校生も褒めてくれました。

ここでは、日本人に会いました。話を聞くと、日本とオーストラリアで弁護士の仕事をしている人だそうで、私にとって良い参考になりました。別日には、ここでクイズ大会が行われました。私は英語をあまり聞き取れないので、問題に回答できるわけがありませんでした。聞き取れたとしても、クイズ自体が海外の内容になっているので分かりませんでした。しかし、その雰囲気だけでも楽しかったです。

日本のポップカルチャー

ホストマザーの Cindy と一緒に外出した際、私は日本の曲を勧めました。unison square garden という私の好きなバンドの曲を紹介すると、ノリノリになってくれたのが嬉しかったです。そして意外だったのが、アメリカからの留学生の Jensen が日本の曲の一つ気に入っていたことです。歌詞の意味は分からないそうでしたが、それでもファンを生み出す曲であることに感動しました。

また、日本のアニメも紹介しました。ここでは私が一番好きな「葬送のフリーレン」を紹介しました。日本でも分かってくれない人がいるというのに、皆が気に入ってくれて嬉しかったです。Jensen は、このアニメのストーリーの始まり方に驚いていました。

家での過ごし方

家では、猫の Pi や Tahi に触れたり、読書をしたりしてゆったりとした時間を過ごしました。ホストファミリーが皆9時頃には寝るので、自然と私の生活習慣も良くなりました。ホームステイ期間中に自分の睡眠時間を見直すことができたのは良かったです。帰国後は元に戻りました。



印象的だった会話

ホストファミリーと一緒に湾を見に行った際、奇妙な形の遊具がありました。Matthew が夜中にもかかわらずそれに乗って揺れていたのので、私は思ったままに What are you doing? と言いました。すると何故か、ホストファミリー間で笑いが生じました。幼児のように遊ぶ Matthew と、日本人らしい発音で素朴に質問をした私という状況が面白かったのでしょうか。

私は、おかしい状況を見て自然に英語が出たことに感動しました。

私の人生のターニングポイント

レッドクリフステートハイスクールでできた友人

ハイスクールで一緒に日本語の授業を受け、レッドクリフ図書館や博物館などを一緒に回ったグループと仲が良くなりました。音楽をやっているということで話が盛り上がり、お互いにおすの曲を紹介し合いました。良い文化交流になりました。また、日本のアニメも楽しんでいるようで私の好きなアニメを紹介しました。とても楽しんでくれました。今後別のアニメも紹介してみようと思います。この人たちとは、趣味が合ったので、話題に困らず、楽しんで英語を話すことができました。意気投合して SNS を交換し、今も時折話しています。



今回の海外派遣による私の変化

英語を話すことへの抵抗感が小さくなったというのが1つです。会話をして楽しむための練習を日本の学校でする機会はありませんでした。そのため最初は、きっちりとした英語でないと失礼かと思っていました。しかし、オーストラリアでは、きっちりとしていなくても伝わり、聞き取れなければ聞き返して良いということに気づきました。そのおかげで、英語でも会話を楽しめる様になりました。聞き取れなければ Pardon? と聞いたり、分からなくても Yeah yeah と相づちを打つてみたりして乗り切れることに気がつきました。派遣期間の終盤には、自ら話し出せるほどまで、気楽に英語を話せるようになりました。

2つ目に、多文化共生の考え方を知ることができました。短い派遣期間でしたが、オーストラリアの自由な雰囲気が好きになりました。オーストラリアにはフレンドリーで陽気な人が多く、皆からのびのびとした雰囲気を感じました。また、オーストラリアには白豪主義を翻したり、様々な人が移住してきたりといった歴史や、先住民族のアボリジニやトレスへの敬意など、多文化共生のもととなる要素がたくさん詰まっています。このために、様々な人がフレンドリーで、うまく共生できているのだと思います。実際にハイスクールでは東欧系の人、日系オーストラリア人、東南アジア系の人など、さまざまな人と話すことができました。素晴らしい文化に触れ、私も多文化共生社会について考えるようになりました。

これからの目標

オーストラリアでの滞在は、私の初めての海外経験となりました。また、様々な価値観や事情を知ることができました。そのため、私は他の国の価値観や国民性にも興味を持つようになりました。また、滞在中、屋台や空港、チェーン店のコーヒーなどを頂いて、どのような場所でも大抵美味しいのではないかと考えました。そのため、オーストラリア以外の国でコーヒーを飲んでみたいと考える様になりました。

海外といえば、私は言語学習にも興味を持ちました。あまり満足できなかった英語だけでなく China airlines で聞こえてきた中国語など、様々な言語を学びたいという意欲が芽生えました。私は普段、好きで英語の勉強をしているため、それが活きて楽しい会話につながったという経験は他の言語への興味を促しています。オーストラリアという国民性や環境が日本とは異なる国に行ったことで私の知る世界が広がり、他のことを学んでみたいという意欲が芽生えたということになります

未来の派遣生へのメッセージ

今回の派遣期間中、長友さんから、何回も「常に笑顔でいること」を聞きました。実際にこれは重要だと思います。笑顔でいると会話を始めやすく、続けやすくなり、場合によっては終わらせやすくなります。私はこれが苦手だったのが反省点です。また、写真の多くで私は他所を向いていたり、真顔であったりして、あまり楽しそうに写っていなかったため、そこに気をつけるとよいかと思います。

私のホームステイ先では、聞いていたほど肉は出ませんでした。そして、何か日本からお土産を持ってこようというのであれば、相手の好みは聞いておいたほうが良いでしょう。私も、バディーの Matthew がポケモン好きだと聞いて、ポケモンの置物をお土産に渡しました。私は油断していましたが、英語ばかりだと疲れます。英語だらけの環境に身を置く派遣中に心の支えとなったのは、日本のお菓子や音楽やアニメでした。一緒に行った7人と日本語で話すのは、気分転換になりました。他にも、日本を感じられるものは持っていったほうが良いと思います。

英語力に関してはあまり心配する必要はないと思います。

お世話になったホストファミリー



父: Cindy Mitchell

母: Rod Wright

バディ: Matthew Wright

留学生: Matthew Jensen



山陽小野田市教育委員会教育長

ながとも よしひこ
長友 義彦

1 事業概要

目的： 友好都市モートンベイ市との相互理解、及び広い視野と国際感覚を持った次世代人材の育成。

実施期間： 令和8年7月29日（水）～8月9日（日）

2 モートンベイ市との交流を通じた相互理解

(1) 施設等の訪問報告

① **学校教育施設（Redcliffe State High School、Scarborough State School 等）：** 中等教育施設（Redcliffe State High School）では日本の教科担任制とは異なり、初等教育施設（Scarborough State School）においても専用教室のある一部教科担任制を実施している。教科担任制では ICT（教員へ配布されているスマートフォン）を活用した出席管理がなされている。生徒が主体的に学習環境を選択する姿が印象的であった。



② **高等教育機関（語学学校）施設（Union Institute of Language）：** 語学カリキュラムの特化性と、短期滞在者に適した柔軟なオーダーメイド研修の可能性について説明を受けた。

③ **社会教育施設（Redcliff Library、Redcliff Museum、Redcliff Art Gallery）：** 図書館は読書の拠点であるのみならず 3D プリンタ等を備えた学習推進拠点となっており、博物館・美術館では地域の歴史・文化を担う明確な役割分担がされていた。

④ **Lone Pine Koala Sanctuary（世界最大のコアラ保護区）：** 1927 年に開園し、1988 年からは日本の企業である加森観光株式会社が経営している。コアラの飼育、カンガルーとのふれあい、タカやフクロウのバードショー、オーストラリアに生息している珍しい虫やカメ、トカゲなどについて説明をうけた。広大な敷地であり、雄大な自然についても感受できた。



(2) 相互理解を推進するキーパーソンとの連携

今後の持続的な交流には、市当局の Roseanne 氏、Redcliff State High School やサビエル高校教職員との関係継続が不可欠である。これまでに派遣した OB・OG を含め、関係した人材を国際交流のために活用することも求められる。

3 次世代人材育成に向けた考察

(1) 広い視野の育成

「広い視野」とは、異文化との比較を通じて新たな認識を得ることと考える。人との触れ合いには、他者を尊重し受け入れる「コミュニケーション・マインド」が不可欠である。今後は、形式的な挨拶に留まらない、気軽な対話を生み出すための事前指導について検討する必要がある。

(2) 国際感覚の醸成

国際感覚の醸成には、「体験」を「経験」へと昇華させるための「省察」を繰り返し行い、経験を再構成することが必要と考える。本市で進めている「見通し→実行→振り返り」という学びのサイクルの身体化を進めていく。

(3) 心理的安全性の確保

教育現場では認知面での学習に加え、人間関係等の「文化づくり」が必要。「間違えてもいい」という心理的安全性の高い学級環境・学校風土こそが英語に対する意欲を引き出し、消極的な牽制を解消するものとする。

4 ICT活用の成果と課題

成果：市教育委員会で開発したアプリ「AussiNote」により、派遣中の中学生と引率者間での情報共有が可能となった。

課題：今後も ICT 活用を推進するため、派遣期間中の通信手段確保や端末運用のルール整備、情報共有等について検討する必要がある。

5 今後の教育行政における検討課題

本市の教育行政として、次の取り組みを検討していきたい。

(1) 文化芸術交流

レッドクリフ地域の歴史、アボリジニ・アート展示など相互の文化交流について検討する。

(2) 連携体制の強化

オンラインミーティングや高校（サビエル高校等）との連携を視野に入れた持続可能な交流モデルの構築を検討する。

(3) 自己肯定感の向上

子どもの自己肯定感を高め、当事者意識を持って自分の人生を生きる力を養うため、教育リソースを戦略的に活用する。前述した学校・学級の心理的安全性の確保も引き続き進めていく。



6 おわりに

本事業に派遣していただき、藤田市長をはじめ関係する皆様に感謝申し上げます。今回の派遣により本市の教育の強みや課題を認識することができました。教育は、家庭や地域など様々な関係性の中でなされるものです。今後も、市内外の教育リソースを活用し「学びがあふれるまち」づくりを推進していきます。



山陽小野田市市民活動推進課

あんどう ともえ
安藤 知恵

中学生海外派遣に引率して



派遣前の活動

昨年に引き続きオーストラリア・モートンベイ市への派遣が決まり、新たな仲間たちと共に出発。この貴重な期間を、生徒一人ひとりが自分自身と向き合い成長できる時間にすると同時に、私自身も学びと喜びを共有できる時間になりたいと考え、モートンベイ市での全てを思いっきり楽しむ覚悟で臨みました。

今年派遣される6名の生徒と初めて顔を合わせたのが第1回オリエンテーション。生徒全員は初めての海外渡航であり、家族と12日間離れて過ごすことは、これまでの人生の中での大冒険です。とても緊張した面持ちでしたが、生徒同士は話をしていく中で、少しずつ表情が柔くなり、同じ目標に向かって行動を共にする仲間ができて心強かったと思います。

第2回オリエンテーションでは、過去に中学生海外派遣事業に参加されたウイーズ先生を講師にお招きし、英語レッスンや当時の思い出アルバムを見せてもらい、話に花が咲きました。今回初めての試みで、昨年の派遣生徒に参加してもらって、交流時間を取りました。ホストファミリーとの生活や、喜ばれたお土産、持参して便利だった物など、引率者が把握していなかった色々な情報が飛び交い、同世代での情報交換は大切だと改めて認識しました。



ホストファミリーへのお土産は、きららガラス未来館で制作したサンドブラストのコップとお皿です。山陽小野田市のガラス文化を知っていただき、日常で使いながら派遣生徒たちを思い出してほしいという願いからです。



出発の5日前、7月24日に壮行会を開催しました。藤田市長をはじめ出席者の皆様から、温かい激励の言葉をいただき、身の引き締まる思いです。さあいよいよ出発です。



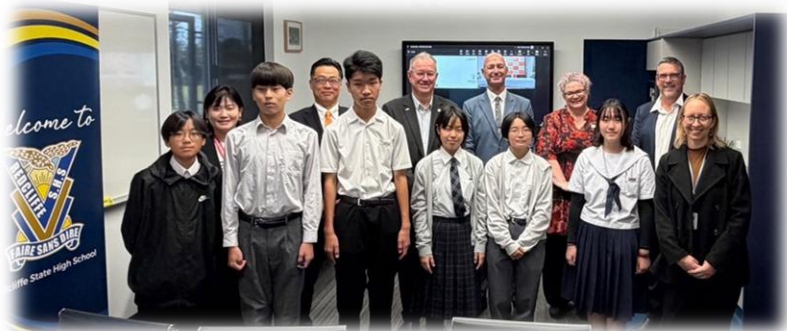
派遣中の活動

日本を出発して台湾経由でオーストラリアブリスベン空港に到着。厚狭駅を出発してから16時間。日本との時差は1時間で、モートンベイ市が1時間早いです。季節は冬で滞在中の気温は最高20度前後。湿度の高い日本と比べて、乾燥して過ごしやすいです。

滞在中はレッドクリフステートハイスクールへ通学します。この学校は、レッドクリフ市（現在のモートンベイ市）と姉妹都市を締結後30年に渡り、派遣事業の学生を受け入れてくださっています。ハイスクールでは現地の学生と一緒に授業を受けます。日本語教室に参加することが多く、様々な交流カリキュラムが用意されており、学生同士がゲームを交えて交流を深めました。



今回は滞在2日目にモートンベイ市と本市の両市長オンラインミーティングをレッドクリフステートハイスクールで行いました。始まる前にピーター・フラナリー市長と面会する時間を設けていただき、挨拶をすることができました。フラナリー市長から英語で「オーストラリアで挑戦したい食べ物は？」との質問を受け、緊張して言葉少なめではありましたが、「ベジマイト」と答えていました。



モートンベイ市ピーター・フラナリー市長と
記念撮影

校外学習では、コアラやカンガルーと触れ合うことができる『ローンパインコアラサンクチュアリー』への遠足や、市内の小学校 2 校へ訪問し、本の読み聞かせをしたり校内トレジャーハンターに参加しました。小学校に訪問した際に、敷地内に掲げてある 3 本の国旗に学生が気づき、旗の意味が何か調べ始めました。小学校の先生に尋ねると、オーストラリアには 3 つの公式な旗があり、これらはオーストラリア国旗とアボリジナル旗とトレス海峡諸島民旗だと教えていただきました。多くの学校では、国旗と先住民の旗を並べて掲げておられるそうです。見過ごしていたら知らなかったことですが、意味を知ることによって理解が深まりました。



最終日、ハイスクールにホストファミリーを招待して「さよならパーティー」が開催されました。生徒たちは出発前から出し物を準備しており、山陽小野田音頭の披露と箸でお菓子を運ぶ競争を披露しました。ホストファミリー対抗で、とても盛り上がりました。



派遣の引率を終えて

今回のモートンベイ市への派遣は、生徒たちにとって初めての海外体験であり、未知の環境で自ら考え行動する力を育む絶好の機会となったと実感しています。ただ想像以上に言葉が通じなかったり、思いが伝わらなかったりする壁に直面した時に、一緒に渡航した仲間がいてくれたことが心の支えになったと聞き、あきらめずに前に進む勇気を持つことができたようです。

ハイスクールでの共同学習や校外学習、特にレッドクリフ博物館で先住民の歴史や文化遺産に触れたことは、単なる観光では決して得られない感動を味わい、異文化への敬意と理解が深まりました。

毎年様々な学習プランを準備してくださっているレッドクリフステートハイスクールの皆様、そして温かく迎えてくださったホストファミリーの皆さまに、心から感謝申し上げます。今回の経験は、生徒たちの視野を広げ、異文化を尊重し合う姿勢を育む大切な一歩となりました。本当にありがとうございました。

編集・発行

山陽小野田市協創部市民活動推進課

〒756-8601

山口県山陽小野田市日の出一丁目1番1号

TEL 0836-82-1134 FAX 0836-84-6937